目次

●大浦を歩く　5
文／河崎悦子
幾すじもの流れにかこまれて

●大浦写真風土記　15
文／大西光衛・小川祥夫・西道了昌・前川　雅
撮影／大西光衛・小川祥夫・西道了昌・平井長栄

クリーク　16
人々　26
はたらく　36
のびる　46

まつる 56
かほる 68
風光 84

●大浦むかし話 101

文／西道了昌・村上善作

御倉の腰
宮田
おっちょのつまり
高木五郎居跡
金鞍降り
赤浜
天狗のタモの木
中大浦村
五色八重梅
蔵屋敷
藤右衛門八千歩
釜の口
助右衛門切
血の川
大男の足跡
小便川
ながたぐろの金馬
大浦ぐろの提燈火

あとがき 109

大浦を歩く

文／河崎悦子

幾すじもの川の流れにかこまれて

加賀百万石の城下町をキャッチフレーズとした金沢という町のイメージがある。旧市内をはずれると、町は趣きを変え、違う『顔』を持つ町に出会える。それら近郊の町は、金沢が栄える前からの古い歴史を持ち、独特の文化や匂いを放ち、時とともに歩んできた。金沢という町に編成され、その個性をその名前の中に押し込め、または時の流れに消えていきつつも、存在意識の中で保ってきた。その匂いはたまらなくいとしく……。

浅野川、金腐川、大宮川、その他幾筋もの名もなき川が流れる大浦校下、かつて水郷農業地といわれ、クリークを持つことを特色として歩み続けてきた町。クリーク、それは、『小さな運河』。町の中を網の目のようにクリークが流れ、人々は舟を使い、生活をした。水と舟は、人々のコミュニケーションにかかすことのできないものであった。町のルーツとしてのクリークを求めて、また、時を経た現代の姿から未来への展望をふくめて、見つめながら、かつてクリークが存在した町を行く……。

東蚊爪

東蚊爪町、この町は、今から千二百六十六年前、奈良時代の霊亀二年（七一六）、元正天皇が赤浜の地に神社（現須岐八幡社）を創設したという記録を持つ。大浦校下内で最も古い歴史を持っている。赤浜と呼ばれるようになったのは、大陸からやってきた東方の民族が襲ってきた際、猛風吹きすさび、たちまちのうちに舟を難破させ、海や砂浜が紅血に染まったからという。この町の歴史の古さを物語るはなしのひとつ。当時は、河北潟が現在の町あたりまであったこともうかがえ、一帯を河崎村、川北村と呼んだことにうなづける。土地の変化がとても興味深い。

純農村であったこの町では、各家ごとに舟を持ち、稲を運んだ。川辺のハンの木を利用してハサをかける姿があちらこちらに見られたという。通りから水田をのぞみ、数本のハンの木がたっているのが見えた。ポツンと待ち惚けをしているようなその姿は、青空の下で優しい風景を生みだしている。農業の機械化は、まずクリークを埋め、道を生み、耕地改革を強要し、ハンの木を必要としなくした。道が交差する。広い道がかつてのクリークの名残りで、狭い道は昔からある道。説明がなければクリークの存在を知ることができない。そして、狭い道は、家々の間に入りくみ、ぬうようにして続き、元の道に出てくる。それはまるで、迷路のよう……。昭和初期に完成したものの、そのまま終戦を迎えた水陸両用の愛国金沢飛行場へ続く道に、飛行橋という橋が残る。実際の目的に使われなかった道や橋、そして、その橋の周りに残る沈みかけた朽ちた舟を見ていると、時の流れと移り変わりの早さをかいまみるような気がする。その時代を知る人にすればどんな思いで見るのだろうか……。

浅野川に『鞍降橋』という名の橋が架かっている。これは、神事の際、鞍具がなく困っていたところ、天から金の鞍が降ってきたという伝説に基づいている。鞍降之庄赤馬場八幡神社から名付けられた。鞍月用水や鞍月町もこれと同じ伝説に基づいて命名されているらしい。河北潟に注ぐ広大な三角州・東蚊爪は、昔はかなりひどい湿地地帯であり、その上、洪水などで町は随分といためつけられてきた。昭和30年初期には実際クリークも活躍していた。時がたち、湊地区の木材団地や木越団地の造成により、水の悩みは解消された。そして、新たな町をめざして、これからも歩み続けていく。

大浦

太古の河北潟が満々と水をたたえた湖水であったことを表しているのが、『大浦』という名前からもわかる。大浦とは、大きく湖が陸地に入りくんだところを意味している。昔

から偉大な文明は全て、大きな河のもとに生まれた。大浦の町も浅野川と金腐川にはさまれたデルタ地帯に位置し、低湿沖積地だったこともあり、集落の形成がはじまったといわれている。その証拠ともいうべき、土器や貝塚らしきものが土中より出土。先の東蚊爪町よりも古い歴史を持つのかもしれないが、それは、まだ定かではないらしい。

古い町には、当然のように、伝説もいくつか残る。旧家早川家の樹齢数百年の二又タモの木には、天狗の腰掛けのようなものがある。天狗が棲んでいたといわれ、天狗が、その木より金腐川を越えた隣の千田町まで一足飛びに飛んでいったというはなし。

タモの木の下には、天狗をまつった小さなほこらも建っている。そのすぐ近くの宮前家の庭には、金沢市保存樹木指定のスダジイの大木もある。

大浦開拓の祖といわれる池田元助の追悼碑が、町のほぼ中央に位置する安居寺境内にある。天文十六年（一五四七）足利義輝の時代、戦乱の世を逃れ、この地に着き、村民とともにクワをもち、荒地を開拓、村の繁栄に努力したといわれる。

金腐川に続く小さなクリークに、舟小屋が残る。中に保管されているのは、朽ちた舟一艘。その横に使っているのか、いないのか、ぽっかり地面に大きな四つの肥溜の穴。田の周りには、季節の花や野菜が無造作に植えられている。そのほのぼのとした雰囲気に、拍車をかけたのは、少しいったところで突然立ち上がったおばあちゃんの姿を見た時。思わず、あっけにとられながらも納得。花の茂みで用をたしていたのだ。その横には、普通に作業をしている友達らしきおばあちゃんの姿。自分たちの畑で、話をし、仕事をし、用をたす。そこで、ごはんも食べるのだろう。自然の摂理である。健康で弱い動物ほど、走りながらでも用をたすという。たとえばうさぎ。野原でのんびり用をたしていては捕まえられる可能性があるからか、走りながらするという。誰でも何度かは経験あるだろうがその感覚は、やはり最高のような気がする。

主は農業であるが、河北潟に近いため、副業としてアマサギ・ゴリ・カワギス・フナな

どの漁も盛んで、昔は『四ツ手網』の漁法で捕る人もいたという。明治時代には、漁業組合もあるほどだったという。

クリークや川が多いということは、もちろん災害にあう可能性も高い。大浦も例外ではなく、幾度かの災害にみまわれている。しかし、人々はその都度に克服、新たな町づくりを進めてきた。想像しながら、何十年ぶりの畦道を、風に吹かれながら歩いていくと、学校帰りの小学生たちが、学校橋を渡って帰っていく姿が見えた。その一本下の名もなき橋では、男の子たちが集まり、釣糸をたれている。自転車に釣道具を用意してきているのだ。ミズアオイの群生、シラサギの飛来。学校帰りが、放課後が、実にのびのびしている。楽しそうだ。楽しい道草を羨みたい気持ちになった。

松寺町沿いの道路には、市街地から進出してきた工場、倉庫、資財置き場が設立されてきている。

木越

歴史と伝説の宝庫といわれているのが木越町。南北朝期すでに、加賀国河北郡倉月荘のうちの摂津家の領として認められていたと史料に残されている。また、加賀一向一揆のメッカ光徳寺があったとして知られ、光琳寺・光専寺を従え、木越三光は、河北潟の湖水をひいたトリデであったという。町中を流れるクリーク跡は、光徳寺の外堀であったともいわれている。長亨二年（一四八八）、高尾城の富樫政親を攻略、天正八年（一五八〇）、織田信長の軍勢に焼き払われるまでの約百年、木越の拠点として、光徳寺を中心に一向宗徒による共和制の国土が築かれていた。このあたりの田畑には『武者づくり』『刀箱』『陣所』など変わった字名があり、一向一揆の名残といわれている。

町の北よりの中心にある福千寺には、光徳寺の戦いでなくなった長連竜の家臣の大原十郎左衛門や光徳寺の墓碑がある。また、福千寺には、蓮如上人ゆかりの五色八重梅の伝説

も残る。赤・白・ピンク・青・黄色の八重梅が実とともに咲くということで、根ともに前田の殿様に献上したが、城内の地に合わないのか、花を咲かせず、元の地に戻したというもの。今でも、赤・白・ピンクの花を一時に咲かすことで知られ、花時の四月上旬には、花好きの見物客がやってくる。観光客ずれした寺を見慣れた目には、小さな町の寺の境内に咲く梅の花は、実に清々しく、目に映るだろう。

光徳寺や福千寺、先の安居寺にしても、大浦校下の地図を見ると、寺は、町のほぼ真ん中に位置する。寺をかこみ、神社を配置し、町が形勢されていったかのような集落づくりがされている。それぞれがそれぞれの歴史と文化を持ち、助けあい、競争しあい、歩んできたのであろう。その独特の町づくりの中を、今歩いている道はクリークの跡か、道かを考えながら、歩く。広い、狭いをぬきにして、なんとはなしに、それがいづれであるかわかるようになってきた。

三町ともに共通していえることではあるが、龍や家紋ではなく、打ち手の小槌やきんちゃく模様の土蔵のある家が続く。土間のある家。五衛門風呂のある家。囲炉裏のある家。家の前に広い庭を持つ家。門がまえからして昔からの地主であることがわかる家。さまざまである。大きな柚子の実がなる庭先。シュロの木などの洋木もめだつ。集落の形態が城下町の趣きとまったく異なる。ここは、どこなのだろうか……。市内から約30分車を飛ばした地にいるのに、タイムスリップしたか、田舎へ帰ったか、どこかを旅をしているような不思議な錯覚。ここは金沢なのだと自分にいいきかせながらも、どこかで納得していない。不思議な、それでいて、妙に懐かしい気分なのだ。

土間や納屋では、お年寄りが内職の漁網のつくろいをする。今日畑でとってきた豆を干す。季節があわないので、見ることはできなかったが、『まくもんづくり』というのもある。魚屋さんに頼まれ、川べりに自生するマコモの葉を夏の天日で干し、編んでいく。鮮魚を包むのに使うという。東蚊爪町に『まくもん』をつくることのできるおばあちゃんが

いるという。

河北潟に、『オニバス』『ヒシ』が繁茂していたのはもう随分前のこと。八間川へヒシを見に行く。白い花を咲かせるのは7～8月で、実がなるのは9月。あとは、朽ち、次の年を水の中で待つ。ヒシの実をアレンジした『ひし坊』が大浦公民館のシンボルマークとなっているほど、この町には、ヒシが多く咲き、なった。今では、この川のほとりに残るのみ。そこには、釣り糸をたれ、ウキのあがるのを楽しみにしている人がひとり。見渡せば、続く平らな水田。遠くに見える山々。昔から田や畑仕事の合間に腰を伸ばし、山々をながめ、風をあおぎ、空を眺めただろう、風景。遠くまで見渡せるということは、なんと気持ちのよいことなのだろうか。文明が発達するにつれ、人々は空へ近付く。代わりに心を狭くしていく。大切にしていきたい風景が現在も変わらずにそこにいきていた。

木越団地

昭和四十八年より五ヶ年計画で木越町内の約三十万㎡の土地に、八百四十五戸の木越団地が造成された。それまで大浦校下の子供たちは、大浦小学校へ通い、木越町の子供たちだけは単独で、明治・大正末まで旧木越小学校へ通っていた。今では、団地から通う子供たちが一番多く、校舎の老朽化にも伴い、新校舎が昭和五十五年、金腐川左岸に建てられた。大浦の新しい風ともいうべき、木越団地の町内会がある。新興町内会には、独特の団結力がある。歴史や伝統がないかわり、しばられることなく、自分たちでつくりだしているという未知数のものがあり、それを支える若い、力強い団結のきずながある。団結が一番の形となって表れるのは、『祭り』。「秋のフェスティバル」の子供みこしや大浦校下文化祭におけるこばと鼓笛隊の演奏など、多彩。また、自分たち自身の治安もしっかりしていて、毎日の夜回りなど、熱心に行っている。清掃の日の徹底、独自の左儀長など、全てが意欲的。

もちろん、大浦校下の伝統的行事には、有名な木越町の「喧嘩獅子」をはじめ、各町の「獅子舞い」や、「虫送り」「地蔵盆」「報恩講」などがあり、各町々で、行事を季節の中で楽しんでいる。その中でも、青年団の活躍は見逃せない。時代をになう若者たちの姿が『祭』では浮き彫りにされる。木越団地の子供たちが、親の後を継ぎ、古き歴史を持つ三町との交流を深めて、新たな町づくりを進めていけば、素晴らしいひとつの校下ができあがるのではないだろうか。古きものと、新しいものの調和。それは、今、日本におけるどの町もがかかえている問題であり、また、課題でもある。それらをうまく乗り越えた時、そこに素晴らしい町ができあがっていく……。

木造建ての旧木越小学校があると聞き、たずねてみたが、すでに取りこわされてしまった後だった。それについては残念であったが、『町起こし』的なものとして、利用していくのもひとつの手といえる。この大浦校下がもつ独特の町づくり『クリークのあった町』を他の金沢の人に、また、石川の人に知らせる意味においても、それらの存在は必要であり、古い町が先頭を切るのでなく、新しい町が行っていけば、今はなくなったクリークもいきてくるような気がした。木越団地内の公園では、子供連れの母親がひなたぼっこをしていた。

湊

山を発した水は、小川となって山をおり、川となって町中を潤し、海へと向かう。ここは、その海のふところ手前。海に背中をむけるようにして、木材団地が続く。金沢の名物寒ブナは、この河北潟が産地であったが、今では、寒ブナ漁の伝承者も随分へった。かつては東蚊爪で舟を借り、エサを買い、大宮川を下り魚釣にやってきた人々で賑わった河北潟も、今では野鳥の楽園となっている。近頃では心もとない人が増えてきていることも

あって、鳥たちにすれば、その方が安心かもしれない。昭和六十二年一月に完成した無人野鳥観察舎をたずねた。木造りの小さな建物の中には、望遠鏡をのぞきこむ、優しい目をしたおじさんやおばさんがいた。潟の四季の移り変わりが絵になっていて、野鳥観察の初心者にも親切。窓からながめる潟には、水面に遊ぶカモの姿が見えた。晴れた日には、遠く宝達山ものぞめる。春には春の息吹、夏には夏の賑わい、秋には秋の趣、冬には冬の静けさで、鳥のいる景色が楽しめる。また、河北潟付近は、自生するガマなどの植物の宝庫でもある。お弁当を持参して、どっかり腰を落ち着けて観察してみるのも、ネイチャー志向ならずしても休日の過ごしかたとして、悪くなさそうだ。

運転免許試験場、消防学校など、新しい建造物も建ちはじめたが、それでも、静けさは、格別。歩く人がいないせいもあるが、少し閑散とした風景。しかし、雑多な街中に比べると心休まる思いがする。新しい道路わきに続く田の一角に、紅色の花咲かすハスがあることを思いだす。夏の日に海水浴へ行くため通った時、見つけたのだ。季節によって、街の色は変わる。それとともに景色はゆれる。ゆれる風景は、土地が自然が生きているという証拠である。

川は旅を終え、海に流れつく。かつてのクリークはほとんど姿は消したものの、やはりそこかしこで生きている。小さな運河が運んだ生活・文化・そして、そこに住む人々の思い。すべてを心の奥にのみこんで海へたどりついてきたのだ。海に聞けば、かつてクリークのあった街の本当の匂いを感じることができるかもしれないと、くしくも飛来してきたセキレイを見ながら、思った。